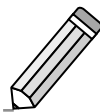


人はなぜ勉強するのか





新緑しんりよくの五月、新学期が始まり、子どもたちも新しい環境かんきやうに慣れてきたころではないでしょうが。

今月の『ニューモラル』では、勉強する意味について、皆さんとともに考えてみたいと思います。

勉強するのは 希望の学校に入るため？

五月の日曜日、藤井ふじいさんの家では久しぶりに家族そろって夕食を囲みました。長男たけしの剛君たけし（高校二年生）も、長女あかねの茜さん（中学二年生）も、明日から一学期の中間テストが始まります。

「明日、数学のテストがあるっていうのに、二次関数にじかんすうなんて全然分らない。いつたい何のためにこんなことやるんだろ

う。将来何の役にも立たないのに……」
と、茜さんが口をとがらせながら言いました。すると、剛君が、

「数学なら、まだいいよ。答えが出たとき、やった！と思うもの。古典の文法なんかもつと無意味だよ。だって、今使っていない昔の言葉の文法を覚えて、どうしようっていうのさ。そんなのやる



くらいなら中国語をやったほうがいいよ。北京オリンピックピックだつてあるしね」と言います。

それを聞いた母親の夕子ゆづこさんが言いました。

「あら、古文つておもしろいじゃない。千年も前の人がどんな暮らしをして、どんなことを考えたり悩んだりしていたのか分かつて。私、『源氏物語』げんじものがたりつて、大好きよ」

「まったくお母さんて、国語の先生みたいなことを言うね」

みんなの会話を聞いていた父親の光夫みつおさんが口を開きました。

「二人とも、どうして勉強するのか考えたことあるのか」

「どうしてつて、中間テストや宿題しゅくだいがあ

るから、しかたなくやるのよ。でも、あんまりそういうこと、深く考えたことないな。だって、どんなに考えたって、結局、今の私にとつての答えは、希望の高校に入るためだもの」

と、茜さんが答えました。

「剛はどう思ってるんだ？」

「えーっ、うっとうしいな、そういう話。僕だつて似たようなもんだよ。いい大学に入つて、いい職に就いて、いい生活をするためだろ」

「へえー、剛は意外に現実的なんだな」

「本音を言うと、みんなそうだろ」

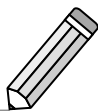
「お父さんだつて、高校時代は歴史の年代の暗記や難しい物理、化学を、どうしてやらなきゃいけないんだろうつて思っていたけれど、大人になつて社会に出る



と、それが教養というか、バックボーンになつて、仕事や人間関係にも役に立つことがあるんだよ」

「ふーん。でも、それつて、大人になつたら分かることなのかな。とにかく、明日テストだから……」

そう言つて、剛君は自分の部屋に引きあげていきました。でも、さっきの会話が何となく気になつて、なかなか勉強に集中できません。



勉強するのは お金もうけをするため？



それから一か月後、剛君が通っている高校で麗澤大学（千葉県柏市）教授の竹原茂さんの講演会が開かれました。

竹原さんは、旧名をウドム・ラタナヴォンと言い、一九四三年（昭和十八年）、ラオスに生まれました。第二次世界大戦後、急速な成長を遂げた日本経済を学ぶため、昭和四十九年、日本に留学しました。ところが、翌年、ラオスで革命が起き、共産党政権が樹立されました。ラオス王国政府内の公務員でもあったラタナヴォンさんは、帰国を断念して日本に亡命し、日本国籍を取得して名前を竹原茂

に改めました。現在は大学で教鞭きょうべんを執とりながら、東南アジア諸国への援助えんじょや日本との交流に貢献こうけんしています。

竹原さんは次のように述べました。

「皆さんは、何のために勉強していますか。将来、お金もうけをするためですか。違うでしょ。地位や名誉めいよを得るためですか。それも違うでしょ。

私の答えは『動物から人間になるため』です。人間は生まれたときは動物とあまり変わりません。でも、いろいろなことを勉強して、少しずつ人間になるんです。そのなかでも私はいい人間になりたいと思います。いい人間とは人の役に立つ人間です。人の役に立ち、世の中の役に立つ仕事をする、やがてお金も入ってくる。だから、お金もうけをするために勉

強するのではありません。勉強して、社会に役立ち、人が喜ぶいい仕事をする、自然にお金が入ってくるんです。

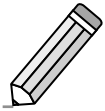
今の日本人は自分のためだけに勉強している人が多いような気がします。私は家族を助けたい、自分の国をよくしたい一心で日本に留学しました。戦後、奇跡きせき的な経済復興ふっこうを成し遂げた日本から多く



のことを学んで、祖国ラオスの発展に力を尽くしたいと思ったのです。

ラオスには日本語を教える学校などなく、言葉には本当に苦労しました。驚いたことに、日本語にはひらがな、カタカナ、漢字と三種類もの文字があるではありませんか。なんて難しい言語なのでしょう。私はいつも教室の最前列に座り、先生の話を録音して繰り返し聞きました。そして、小さな黒板を注文して作ってもらい、漢字を何度も書いたり消したりして練習しました。それでもなかなか覚えられません。くじけそうになると、『日本に学んで、ラオスのために力を尽くすという目的を実現するんだ。そのために今ここががんばっているんだ』と、何度も自分に言い聞かせました」





いい人間になるために 勉強する

剛君は「いい人間になるために勉強する」という言葉を聞いて、そのような考えもあるのかと思い、とても驚き、感動しました。そして以前、家族で話していたときには、漠然ぼくぜんとしていて腑ふに落ちなかったことが、くつきりとした形となっ



て現れたような気がしました。友だちも同じところに感銘かんめいを受けた人が多かったようです。

教室では次のような感想文が紹介されました。

「私は今回、竹原先生のお話を聞いて、一つ誤解ごかいしていたことに気づくことができました。それは『何のために勉強するのか?』ということでした。私は将来、自分が生きるためのお金をもうけるため、すてきな大学へ行くため、よい職に就くためだと思っていました。しかし、『いい人間になるため』に今勉強しているとい

うことに気づき、これからは少し意識して生活していこうと思いました。勉強は人のためではなく、いやいやするものではなく、自分が成長するための大切なものだとこのことをあらためて学びました」

（高校一年女子）

この感想文を書いた生徒は、それまで華やかな仕事、収入のいい仕事にあこがれていましたが、竹原さんの話を聞いてから、自分が好きなことは何か考えるようになったそうです。そして、小さい子が好きで、親戚の子や近所の子どもたちといっしょに遊んでいると、すごく楽しくて幸せな気持ちになれることに気づき、幼稚園の先生になろうと決めました。両親も理解してくれ、担任の先生も「絵も字も上手だし表現力もあるから、

きつといい先生になれるよ」と励ましてくれました。

また、次のような感想文もありました。

「勉強熱心な竹原先生を見習って、僕も勉強を頑張ろうと思いました。自分ではけっこう勉強しているつもりでも、それはただの自己満足にすぎなかったと反省するいい機会だったと思います。これから学んでいくさまざまなことを家族・友人のために、大きく言えば社会のために





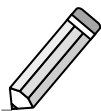
使つていこうと思ひます」(高校一年男子)
いつも休み時間にいっしょに遊んでい
る友だちがこんなにしつかりしたことを
書いているのを知つて、剛君はびつくり
しました。

剛君が作文の内容を褒めると、この友
だちは、「父のことを尊敬していて、将来
は父のような薬劑師やくざいしになりたいと思つて
いる。単にカルテどおりに薬を調合する

だけではなくて、患者さんとコミュニ
ケーションをとりながら、薬の飲み方や
健康管理についても話せるような薬劑師
になりたい」と、話してくれました。彼
は、薬劑師としての理想の姿まで思い描
いていたのです。

このことがあつてから、剛君は「いい
人間になる」とはどういうことか考える
ようになりました。

「いい人間」とは、人や社会のために役
に立つ人間、自分の力や才能を生かして
社会に貢献できる人間のことだ。それな
ら、自分の才能とか、他の人にはない独
特の持ち味とはいったいなんだろう。剛
君は、幼いころのことやこれまで勉強し
てきたことを振り返りながら、真剣に自
分に向き合いました。



本気を出さないと迷う

冬休みが終わり、三学期になりました。

剛君の高校では、一年生の三学期は文系コースか理系コースを決める決断の時期です。剛君は文系コースに決め、美術系の大学に進学しようと考えました。小学生のころから絵に興味きょうみがあり、古い美術品の修復をする仕事かがしたいと思っただけです。しかし、絵を描いたり工作は好きだったけれど、本当に美術の才能があるのかどうか不安でした。

父親の光夫さんに相談すると、「美術研究所（美大受験のための予備校）に通って、ゆつくり考えてみたらどうだろう」と勧められました。

剛君は、週一日美術研究所に通い、基礎的な勉強を始めました。しかし、デッサンがうまくなっていないのか自分ではよく分かりません。自分には才能があるのか、美大に合格できるのか、合格したと





しても一生の仕事としてやっていけるのか、常に不安がつきまといました。

そこで、美術研究所の先生に今の気持ちを打ち明けると、先生は次のように答えました。

「本気を出してやってないから、いつまでも迷うんだ。本気を出してやったら結果はついてくる」

話はそれだけでした。

二年生の夏休みに入ると、剛君は毎日、美術研究所に通い、ひたすらデッサンを描き続けました。朝九時から夕方六時まで、硬い椅子に座り、石膏像に向かい鉛筆を走らせませす。竹原先生が日本語と格闘していた努力を思い出しながら、自分の中に隠れている才能をつかみだそうと必死でした。

分かるためには全力でぶつかる

二か月後、自分なりに納得できる作品が仕上がりに、剛君はあらためて美大に進学する決意を固めました。

剛君は、自分が美術の方面に向いているかどうか迷っていたときは、デッサン中も集中できないことが多く、それなりの作品しか生まれませんでした。しかし、迷いを振り切って全力でぶつかったときに、進むべき道が見えてきたのです。

※

長年、青少年の教育に携わってきた岩橋文吉さん（九州大学名誉教授）は、次のように述べています。

「もしあなたが青少年ならば学校で習う国語、数学、社会、理科をはじめ芸術、

体育、総合学習などに至る各教科目に、全力を挙げて取り組んで自分を試してみることが大切です。そうすることによって、自分の得意な分野、あるいは好きな分野がどこにあるのかがわかってきます。というのは、各教科目の中身は人類文化の各分野そのものですから、取り組んでみると得意な分野、好きな分野、つまり持ち味に適合する分野がどこにあるかがわかってくるからです。（中略）ここで大切なのは、わかるためには全力でぶつかるということです。中途半端なぶつかり方では中途半端にしかわからないからです」（『人はなぜ勉強するのか―千秋の人吉田松陰』モラロジー研究所）

自分の内にある純金を磨き上げる

さらに岩橋さんは同じ本の中で、幕末の激動の時代に多くの人材を育てた吉田松陰（一八三〇～一八五九）の事績から次のようにも述べています。

「松陰は、人はどんな人でも真実な人生を生きるために学問・勉強をすべきであるとの主張に立っていました。その主張は、天が各人すべてに授けた『天性』を確信し、これを尊重することに基づいていました。（中略）松陰はまたこの天性を純金にたとえ、人は誰でもその内面に天性の純金を含んだ金の鉱石のようだと説いています。人は誰でも尊ばれねばならないのは、それがただの石ころではな

く内面に純金を含んだ金の鉱石だからです」

このように、私たち一人ひとりとは、純金のような尊い天性が天から与えられていると、信じて勉強しなければなりません。鉱石の中から純金を取り出すのですから、大変な苦労が必要でしょう。しかし、かけがえのない尊い天性をみずから見つけ出し、それを存分に発揮する喜びを味わえる人こそ、幸せな人と言えるのではないのでしょうか。

また、人それぞれには、さまざまな尊い天性が秘められていることでしょう。学問・技術・芸術面で才能を発揮する人

がいれば、神仏を敬う心、奉仕の心、人を育てる心、思いやりの心を持つている人など、さまざまな尊い天性があるはずです。尊いということは、優れていっていることではありません。他人と比較して優れているとか劣っているとかという

ことではなく、優劣を超えた、それ自体がかげがえのない尊さです。
 私たちは、自分の内にある純金を自分の手で探し出し、それを一生かけて磨き上げ、その輝きを社会のため、人のために役立たせていきたいものです。

